体験
失敗
のススメ

～体験すること，つまずくこと，

それを成長の原点として～

平成２９年２月２８日

柏市社会教育委員会議

提言書

はじめに

最近，外で遊ぶ子どもたちの声を聞かなくなった気がしませんか。

以前は，川でザリガニ釣りをしたり，公園の茂みに秘密基地を作ったり，子どもたちの遊ぶ姿をそこかしこで見かけたのですが，近頃は，公園のベンチに数人ですわり，みんなで黙々と携帯型ゲームをしている姿をよく目にします。

ゲームをすること自体を否定するわけではありませんが，何かもっと，子どもの頃に経験すべき大切なこともあるのではないでしょうか？

国では，体験活動が子どもたちの自己肯定感を高めるという考えのもとで様々な議論がなされています。
体験活動を通じ，子どもたちの社会性や感性を養い，視野を広げること等を提言した教育再生会議の第二次報告やそれを踏まえて自然体験活動の充実等を盛り込んだ新学習指導要領の改訂などにより，教育改革が着実に進められています。

柏市社会教育委員会議では，最近の子どもたちの自己肯定感が低くなっていることをテーマとして取り上げました。そして，実際に自分たちの経験や現場で感じていることを踏まえ，より実践的な議論を積み重ねながら，この「体験のススメ　失敗のススメ」をまとめあげました。

この提言により，柏市の子どもたちがさまざまな体験活動に参加し，まちのいたるところから子どもたちの声が聞こえてくることになれば幸いです。

柏市社会教育委員会議
議長　　池　沢　政　子

目　次

1　今の子どもたちに起きていること　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

2　自己肯定感の低い子どもたち　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

3　自己肯定感を高める体験活動　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4

4　活動を阻害する要因　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5

5　提案
　提案１　多種多様な体験を　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　6
　提案２　真実の体験を　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
　提案３　失敗を恐れずに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　10
　提案４　親も積極的にかかわりを　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12

6　柏市社会教育委員会　メンバー　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13

１　今の子どもたちに起きていること

子どもたちを取り巻く環境は，核家族化や少子化・高齢化の進行，雇用形態の変化，高度情報化などにより，大きく変化していると言われています。

子どもたちのより身近な環境に目を向けると，家の近くには子どもたちが気軽に遊べる場所を見かけることは少なくなってしまいました。また，子どもたちは，放課後や学校がお休みの日は，部活や習い事などでスケジュールがびっしりと埋まっていて遊ぶ時間もないという声をよく聞きます。

そのような中，最近，様々な場で，子どもたちの自尊感情や自己肯定感が非常に低くなっている，自信がなくなっている，さらには，低学年の子は将来の目標を表明できなくなっている，などといった話しをよく聞きます。

象徴的な例を挙げると，子どもたちに「～してみようか？」と問いかけると，「無理！」という答えが返ってくることが多々あります。

子どもたちに，一体何が起きているのでしょうか？

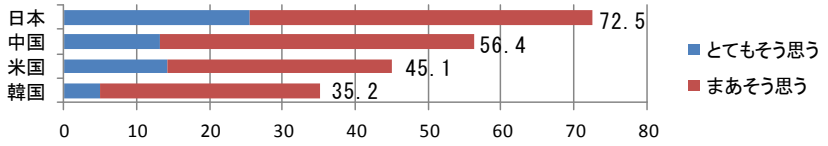
２　自己肯定感の低い子どもたち

日本の高校生は，ほかの国の高校生と比べると，自己肯定感が低いといわれています。

ある調査では,「自分はダメな人間だと思うことがある」と感じている日本の高校生は７割以上にのぼっており，諸外国に比べて自己肯定感が低いという調査結果が出ています。

○高校生の生活と意識に関する調査報告書

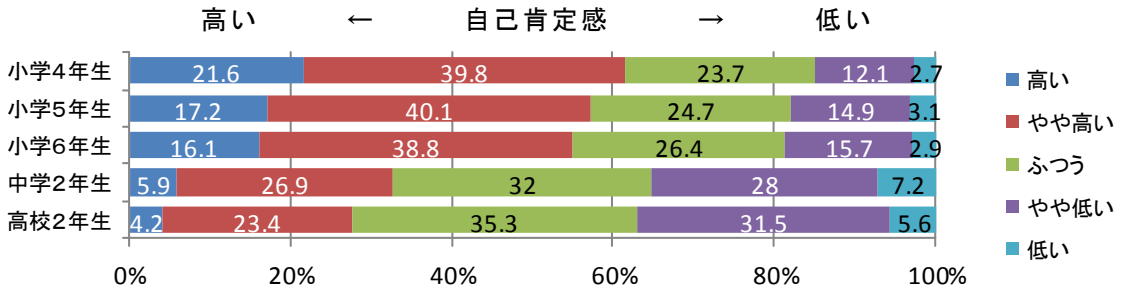
～自分はダメな人間だと思うことがある～



（平成 27 年（独）国立青少年教育振興機構）

次に，日本の子どもたちの自己肯定感を，小学生，中学生，高校生の各学年により比べた調査によると，小学４年生では自己肯定感が高い子どもが約６割にのぼるのに対し，学年が上がるにつれてその比率は下がっていき，高校２年生になると３割を切るまで下がっているという結果が出ています。

○青少年の体験活動等に関する実態調査（平成 26 年度調査）



（平成 26 年（独）国立青少年教育振興機構）

日本人は，謙遜・謙虚な国民性から自己を肯定的に評価するということを遠慮する傾向もあると言われていることから，他国と比較した結果を一律に評価することは難しいところもあると言われていますが，学年が上がるにつれて自己肯定感が低くなっていることは否めません。

○「ほめて育てる」ことと自己肯定感との関係について

「子どもはほめて育てよう」という考え方があり，現に広く行われています。しかし，私どもの社会教育委員会議では，「もしかしたら，子どもたちをほめて育てることにより，自己肯定感が下がるのではないか」という問題提起がありました。

「ほめることで自己肯定感が育まれるのか」，

「ほめて育てた結果，過保護となり自己肯定感が下がるのでは」，

「むしろ，叱ることが必要」，

「子どもは叱られることで，社会に受け入れられるような態度や行動を身につけていくのでは」

「親は叱るよりもほめて育てるほうが楽なのでは」

「自己肯定感が下がっているからといって，今度は叱れというのは安易」

「ほめることは大事だが，ほめ方がポイント。能力や結果ではなく，努力やがんばった過程をほめることが大事」

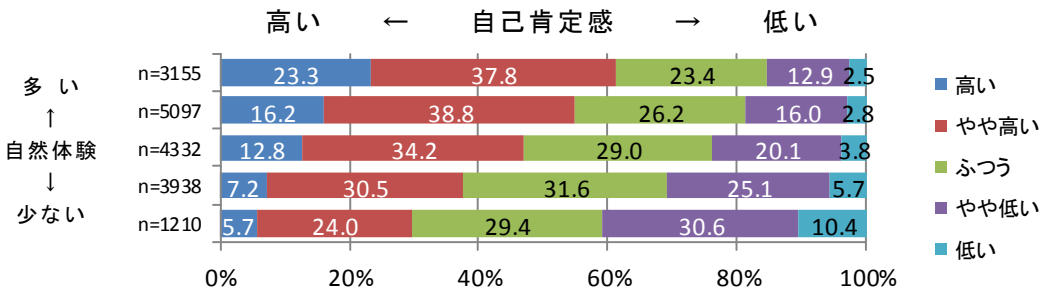
など様々な意見が出ましたが，「ほめて育てる」ことと自己肯定感との関係を明確に示せるまでにはいたりませんでした。

（社会教育委員会議の議論から）

３　自己肯定感を高める体験活動

自然体験や生活体験，お手伝いなどの体験が豊富な子どもや，生活習慣が身についている子どもほど，「今の自分が好きだ」，「体力には自信がある」といった自己肯定感が高くなる傾向が見られるといわれています。

○青少年の体験活動等に関する実態調査（平成 26 年度調査）



（平成 26 年（独）国立青少年教育振興機構）

子どもたちの自己肯定感を向上させる要因はさまざまなものがあると考えられますが，この提言書では，体験活動に絞って検討を行うこととしました。

なお，国では新学習指導要領を改訂（平成 20 年 3 月）し，体験活動を積極的に受け入れることなどを盛り込みました。しかし，学校に今以上の負担をかけたり期待をしたりするのではなく，地域に根差した団体や家庭が主体となって，子どもたちの体験活動の場を作り出していくことを目指していくことが理想であると考えます。

○体験活動と学校の限界

体験活動が推奨される中で，子どもたちに体験活動をさせるには学校で取り組むのが一番早いと思います。しかし，それで果たしていいのでしょうか。地域にやってもらうのは大変なことですし，保護者も忙しいのは理解しているのですが，学校にはあまりに負担がかかりすぎていて，これ以上体験活動を充実させていくのは無理だと思います。

（社会教育委員会議の発言から）

4　体験活動を阻害する要因

子どもたちは体験活動に取り組むことによって，自己肯定感が向上すると考えられることから体験活動におおいに参加してほしいところですが，子どもたちには体験活動に参加できないさまざまな要因があります。

たとえば，

・体験活動の場と機会が減少している。
・親に体験活動の経験がないために，子どもに教えられない。
・子どもたちは忙しく，体験活動に参加する時間がとれない。
・親が忙しいために，子どもと過ごす時間がない。また，時間があっても自分の趣味を優先し，子どもと一緒に体験活動に取り組む時間がとれない。
・親が地域とつながっていないため，子どもが地域の体験活動に参加するきっかけがつかめない。

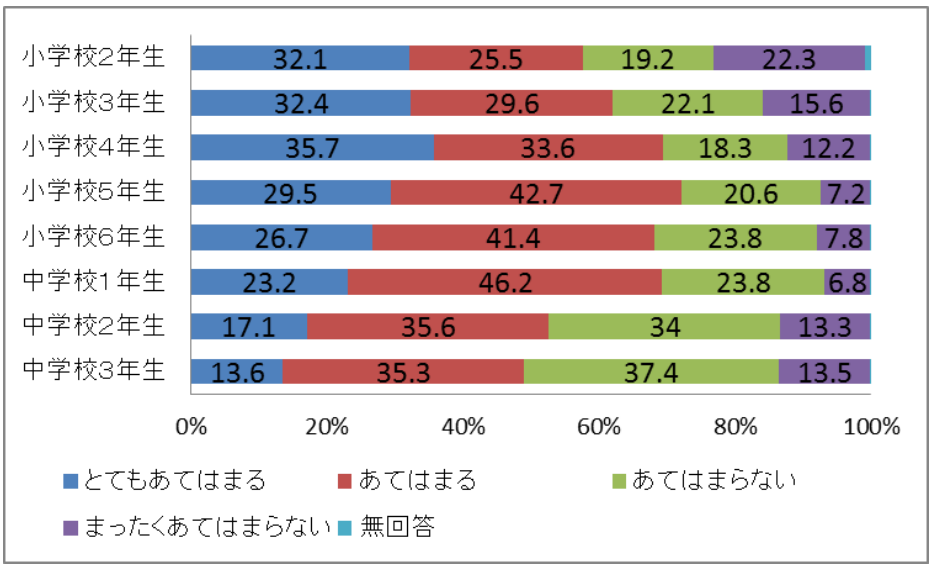
などが考えられます。

○柏市の中学生のボランティア参加比率

下の図は，「地域の行事やボランティア活動に参加しようと思いますか」という問いに柏市の児童生徒が回答した結果です。小学校高学年から中学にかけて比率が下がってきているのは，単に意欲が低いということではなく，部活動や習い事のために参加することができないということがデータの裏に隠れていることを知っていただければと思います。

～地域の行事やボランティア活動に参加しようと思いますか～

（平成 27 年度の柏市生活学習意識調査）



（社会教育委員会議の発言から）

５　提言

ここまで,子どもたちを取り巻く環境や自己肯定感の低さ,体験活動に参加できない要因などについて確認してきましたが，その確認に基づいて，子どもたちの体験活動はどうあるべきかについて，次のとおり提言します。

提言１

多種多様な体験を

子どもたちは体験活動に取り組むことで，様々な経験を積み，心豊かに成長していきます。

一般に体験活動は,「生活・文化体験活動，自然体験活動，社会体験活動の３つに大きく分類され，子どもが，直接自然や人・社会などとかかわる活動を行うことにより，五感を通じて何かを感じ，学ぶ」とされています（「平成 26 年版　子ども・若者白書」(内閣府)）。

私たちはその分類を踏まえた上で,体験活動を,火おこしや魚とりなどの「生物的自立」のための体験活動と，子ども参画による地域づくりなどの「社会的自立」のための体験活動とその他の体験活動の３つに大きく分類しました。

その上で,「生物的自立」のための体験活動により生きる力を身につけるとともに「社会的自立」のための体験活動により他者との関係性や責任感，地域社会での役割等を身につけていくことが必要であると考えました。

テレビやゲームなどのヴァーチャルな世界が蔓延し，中には家に引きこもってしまう人もいます。また，地域社会ではコミュニケーションが弱まり，人間関係が希薄化しています。
そのような中で，子どもたちが自立した人間，社会性を身につけた人間として成長していけるように，身近な地域での活動，多世代交流の活動等，多種多様な体験活動に参加する機会を与えていきましょう。

○体験活動と読書活動

子どもたちが健やかに成長していくためには体験活動だけでは足りません。時には自己否定につながるような体験をすると思うのですが，それもしないよりはするほうが絶対によいのであって，それをフォローするのが読書であり，また，自分の体験を深めたり，広げたりするのも読書であると思います。そのように，体験活動と読書とをつなぎ合わせて考えていくことも必要であると思います。

（社会教育委員会議の発言から）

○ヴァーチャル体験と現実体験

親戚の子どもが馬を飼育するゲームが大好きで，全国大会で優勝しました。そして「馬の飼育をする人になりたい」と言い出しました。そこで，実際の馬に触ったことはあるのかと尋ねたところ，「ない」と。「でも，僕は絶対にできる」というので，では，就職する前に，一度馬のいるところに行って馬に触ってみろと話しました。その子は実際に馬に触りに行ったのですが，蹴られそうになり，怖くてもう絶対に行かないと言って帰ってきました。ゲームでは僕の思い通りになるけれど，実際に馬に触れてみると，馬にはおだやかな面もあれば凶暴な面もあることが初めてわかった，と。

ヴァーチャル体験であるゲームをきっかけとして，本物の馬と触れ合うといった実際の体験につながっていった一つの例でした。

（社会教育委員会議の発言から）

提言２

真実の体験を

体験活動に取り組むことにより，子どもたちは一回りも二回りも成長していきます。

しかし，その体験活動の中にはお膳立てされた「疑似体験活動」のようなものも見受けられます。

たとえば，キャンプを例に挙げると，大人が事前に，テントを張り，食材を鍋に入れれば食事ができるように準備し，参加した子どもたちの間でけんかが始まれば仲裁し，すべてタイムスケジュール通りに進んでいくといったものが見受けられます。

そこに参加した子どもたちは，あたかもすべて自分でやったかのような自信を持ってしまうことがあります。

もちろん，このような体験活動も，時間的な制約があったり，参加する子どもたちのレベルに応じた内容であったりなど，さまざまな配慮のもとで行われているものと思われます。しかし，やはり子どもたちには，自分の力と仲間たちとの協力によって，活動の過程で生じるさまざまな困難を乗り越え，真実の体験を経験してほしいと考えます。

子どもたちには，お膳立てされた体験活動や体験っぽい活動ではなく，困難を伴っても，より真実の体験の場を与えていきましょう。

○偽りの体験（イベントにて）

大学生とイベントをしている中で，「それ，やります，できます，やらせてください」という子がいるのですが実際に全部任せると，できなくなってしまう。できないと「なんで手伝ってくれないのか」とキレてしまう。それを見ていて思うのは，周りの大人が失敗させないようにしてしまい，自分ができると勘違いする子をたくさん生み出してしまっているのではないかということです。

偽りの体験ではなく，自分で乗り越えた本物の体験によってしか，体験の本当の効果は出てこないのではないかと思います。

周りの大人たちが，我慢をし，失敗を含めて体験させてあげることが大事で，そうでないと，詰め込み教育と同じで，詰め込み体験をいくらさせてもまったく変わらないのではないかと思います。

（社会教育委員会議の発言から）

○きゅうり一本のおかず（イベントにて）

子どもたちの主体性を育てるために子どもたちに全て任せ，大人は何も口を出さないというイベントを行っています。

お弁当も，親は手伝わずに自分たちで作って持ってくるのですが，最初に，お弁当にご飯だけを入れ，おかずにはきゅうりを一本だけ持ってきた子がいました。本人は「時間がなかった。だから俺はこれでいい」と。まわりの子どもたちがそれを見に来てばかにしても，「うまい，うまい」といって食べる。「俺は自分で作って，自分でこれでいいと決めたから，いいんだ」と。その潔さに他の子どもたちの自主的な気持ちが膨らんでいきました。実は親に手伝ってもらって見栄えのいいお弁当を持ってきていた子がたくさんいたのですが，「きゅうり一本のおかず」から，雰囲気が一気に変わって，自分で作ったお弁当を持ってくるようになりました。また，その子どもたちを見守っていた保護者もどんどん変わっていきました。

自分のお弁当のおかずを自分で買いに行く。買いに行ったときに切り身で売っている魚を見る。自分が主体的に動いたときに，分からないことを親に聞いたり，周りの人に聞いたりすることでひとつひとつ身につけていく。それがさらには，自分の道を自分で見つけるということにつながっていくのだと思います。

（社会教育委員会議の発言から）

提言３

》 失敗を恐れずに

誰しも失敗はしたくありません。
成功体験は素晴らしい経験となり,また次への自信へとつながっていきます。しかし，場合によっては，失敗したことの方がより心に刻まれ，その経験が，のちの人生で役に立つことも多々あります。

私たちは，あえて，子どもたちには失敗を経験してほしいと考えます。

失敗することで，失敗に気づく力，そして，失敗を認める勇気が身につきます。
失敗することで，自分に向き合い，自己認識が深まります。
失敗することで，想定外の課題に対し，解決策を模索します。
失敗することで，成功に向かって，最後までやりきろうとする意欲が身につきます。
失敗することで，心が打たれ強くなります。
失敗することで，他人の失敗を許すことができるようになります。

子どもたちは，失敗から多くのことを学び，成長するのです。
失敗を乗り越えて手にした成功体験は，すばらしい経験となります。

子どもに体験活動をさせるときには，大人は成功へのレールを敷くなどの関与をできる限り行わないようにしましょう。

子どもたちは，ぜひ，失敗を恐れず，多種多様な体験活動を経験してください。そして，さまざまな失敗をしてください。その失敗を乗り越えていくことで,「何か」を見つけ，つかんでください。

○自分で調味料を選び，計り，調理する料理教室

子どもの料理教室では，たいてい，各料理台に材料が置いてあります。そして調味料も，お砂糖が大さじ２杯であるとか，おしょうゆが大さじ１杯であるとか，計量された状態で置かれています。

それらをフライパンに順番に入れ，指示された火力で炒めます。

まず，失敗することはありません。

そのような料理教室が多いのですが，それではつまらないのではないでしょうか。

たとえば，教室の前に，お砂糖や塩のつぼ，おしょうゆやお酢のビンなどを並べておく。子どもたちはそれぞれ，計量器具を使い，必要な調味料を自分の調理台に持ってきて料理をする。作っている途中で味見をすると，少し砂糖が多かったり，少なかったり，また，出来上がってみると，また味が変わったり……。味を通じて，自分の失敗を感じることができます。そして，工夫をすることも大事ですし，そのまま受け入れることも大切です。いずれにしても，貴重な経験となるものと思われます。

ぜひ，そのような料理教室をやっていただきたいと思います。

（社会教育委員会議のグループワークから）

提言４

親も積極的にかかわりを

あらためて言うまでもないことですが，子どもの成長には親のかかわり方が非常に大きく影響します。これは体験活動でも同じことが言えます。

１　親は答えを用意しない

子どもが体験活動に参加した時，その活動の意義や体験したことで得られるであろうことについて，親は答えを用意しないほうがいいと思います。親は，ついつい，成果や意義，効果を求めてしまいがちです。

しかし，子どもが体験活動に参加しても，効果がすぐに目に見える形であらわれるとは限りません。体験活動に参加したことにより子どもたちの中にまかれた種は，時にはすぐに花を開くこともあれば，じっくりと時間をかけて成長していくこともあります。

そして，親の思い描いた答えと子どものそれは，必ずしも同じとは限りません。しかし，親にこれが答えだと言われれば子どもはそれを受けいれてしまうでしょう。仮に同じであったとしても，答えは与えられるのではなく，自分で見つけることに大きな意味があります。

親は，答えを示すことなく，ただ温かく見守りましょう。

○意義を求める親

柏市青少年相談員は，毎年夏に市内３０ｋｍのコースを中学生が夜通し歩く「オーバーナイトハイク」というイベントを実施しています。この活動にかかわる大人の方から「この活動の意義は何ですか？」，「なぜ，このような活動をするのですか？」という質問を受けることが増えてきました。活動に対する正解を求めてくるのです。その質問に対して私は「自分で探してください」と答えています。このイベントに参加する子どもたちが手探りで答えを探しに来るのですから，大人もその活動にかかわる中で答えを探してほしいと思っています。そしてその答えは，活動にかかわる大人が２００人いれば２００個の答えがあると思っています。答えを用意するのではなく，答えを探す場を用意することが我々の役目であると考えています。

（社会教育委員会議の発言から）

２　親も一緒に体験活動を

親も巻き込んでいけるような体験活動は，とても大事であると考えます。

親も体験することで，親が子どもに今まで以上に目を向けることとなり，また，親子で参加した体験活動について家庭で話をすることにつながり，親子のコミュニケーションが深まっていきます。

子どもの体験活動に，親もぜひ，一緒に参加しましょう。

〇体験活動と貧困家庭

今，格差社会などと言われており，貧困は社会的な問題となっています。経済的にゆとりのある家庭では子どもにより多くの体験活動の機会を与えられる一方，貧困家庭では，子どもをキャンプに参加させたいと思っても，お金の面で難しいというのが現実です。体験活動の主催者にあっては，そのような面に配慮いただくことを望みます。

（社会教育委員会議の発言から）

３　子どもの限界に挑戦させる

親だからこそ，子どもの限界に挑戦させることができるという面があると思います。

普段から子どものことを見ている親だからこそ，どこまでが弱音でどこからが本当の限界なのか，それを見極めて挑戦させることができるのだと思います。

限界は自分がダメだと思ったところが限界です。子どもの体力や性格を見極めて，その限界のちょっと上を目指し挑戦させる気持ちを親が子どもに持たせるようにしましょう。

４　親は責任を

親は子どもを体験活動に参加させるときには，子どもの行動に対して親としての責任を持ちましょう。

６　柏市社会教育委員会議　メンバー

議　長	池　沢　政　子
副議長	村　田　修　治
	宇佐見　文　夫
	加　藤　定　浩
	塚　田　昌　美
	下　田　豊　繁
	川　鍋　伸　治
	吉　田　勝　彦
	井　上　玲　子
	淺　岡　　裕
	神　田　玲　子
	永　井　行　雄
	小　林　新　子
	岩　渕　弘　美
	清　水　雅　文

任期：平成 27 年 6 月 1 日～平成 29 年 5 月 31 日

むすび

社会教育委員の職務は，社会教育に関する諸計画の立案，教育委員会に対する答申・建議等を行うとともに，青少年教育に関する指導・助言を与えることと規定されています。

柏市の社会教育委員は，平成 27 年 6 月に任命されました。

１年目は主に，柏市生涯学習推進計画について，協議を行いました。

その際に，子どもたちの体験活動に関することがテーマとしてあがったことから，２年目である今年は，体験活動にテーマを絞って議論をし，提言書を作成しようということになりました。

子どもたちの体験活動については，国においても，中央教育審議会や教育再生会議のほか，平成 28 年 9 月には「青少年の体験活動の推進方策に関する検討委員会」を設置し，様々な角度から議論をされているようです。

柏市の社会教育委員会では，国等の議論はそれとして，子どもたちと最前線で接している現メンバーだからこそ提言できる自分たちらしいものを作ろうという共通認識の下で協議を重ねてきました。

その中でキーワードとなったのが「失敗」でした。

失敗こそが，もっとも多くのことを学べる体験であり，成長のきっかけになることから，子どもたちにとって失敗を経験することが大切であるということが今回の議論の到達点でした。

そこで，提言書のタイトルも「体験のススメ　失敗のススメ」としました。

柏市では，さまざまな団体が活発に活動しており，子どもたちの体験活動の機会を与えてくれています。

私たち社会教育委員も，それぞれが属する団体等において，子どもたちの体験活動のさらなる充実に向けて活動してまいります。

柏市社会教育委員会議
副議長　　村　田　修　治